

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 トラフグ

学名 *Takifugu rubripes*

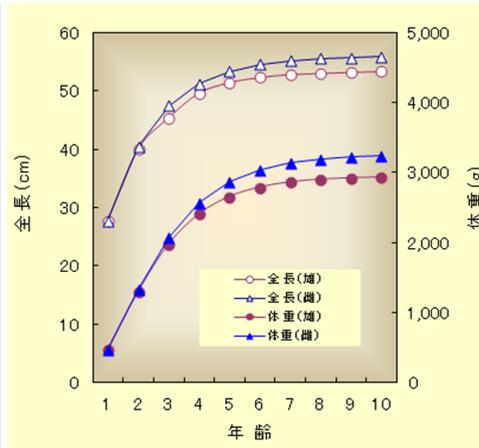
系群名 日本海・東シナ海・瀬戸内海系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳
 成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳
 産卵期・産卵場: 春期(3~6月)、七尾湾、若狭湾、福岡湾、有明海、八代海、関門海峡周辺、布刈瀬戸、備讃瀬戸
 索餌期・索餌場: 周年、日本海、東シナ海、瀬戸内海、黄海
 食性: 仔魚後期までは動物プランクトン、稚魚は底生性の小型甲殻類、未成魚以降は魚類、エビ・カニ類
 捕食者: 不明

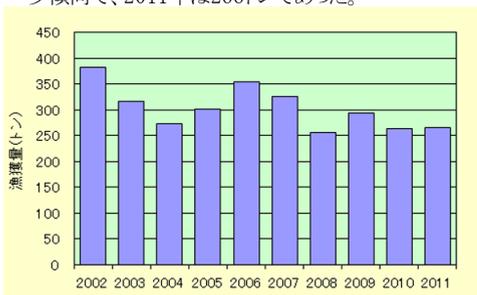


漁業の特徴

七尾湾、若狭湾、福岡湾、有明海、八代海、関門海峡周辺、布刈瀬戸および備讃瀬戸では、3~6月に2歳以上が定置網、釣り、敷網によって漁獲され、7~1月に0歳が定置網、小型底曳網、釣り、延縄によって漁獲される。日本海、東シナ海の沖合、豊後水道および紀伊水道では、12~3月に0歳以上が延縄によって漁獲される。

漁獲の動向

本系群の長期の漁獲量データは存在しないため、この指標として、下関唐戸魚市場(株)における取扱量(暦年)を用いた。取扱量は1971~1993年に610~1,727トンで推移後、1994年から急減し、1997年以降106~313トンと低水準で推移し、2011年は136トンであった。本系群の漁獲量(漁期年:4~3月)は2002年の383トンから変動しながらも減少傾向で、2011年は266トンであった。



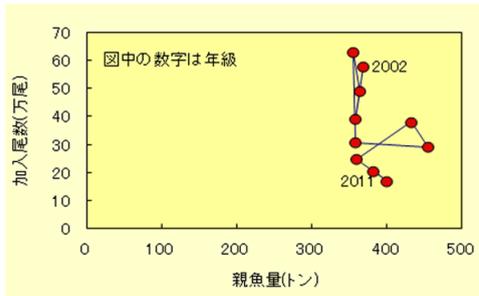
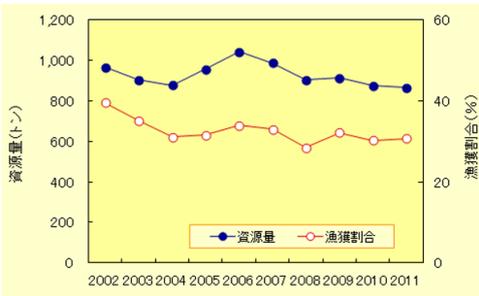
資源評価法

2002~2011年の資源量は、日本海、東シナ海および瀬戸内海における0~5歳と6歳以上をプラスグループとした年齢別漁獲尾数を用い、Mを0.25と仮定して、コホート解析により推定した。年齢別漁獲尾数については、昨年度までは、全長組成を混合正規分布群に分解して算出していたが、本年度より、Age-length keyと全長階級値別雌雄比を用いて算出した。

資源状態

資源量は、2002年の967トンから2004年の877トンに減少した後、2006年の1,043トンに増加したが、その後は減少に転じ、2011年は866トンであった。水準は、長期の下関唐戸魚市場(株)の取扱量の推移から低位、動向は、資源量の推移から減少と判断された。将来予測から現状の漁獲および人工種苗の放流が継続された場合、資源量は減少していくと推定される。明瞭な再生産関係が認められず、2006年以降RPSが低下傾向である。FとSPRの関係から加入乱獲であることが示唆された。人工種苗の混入率は平均0.27、添加効率は平均0.11と推定された。



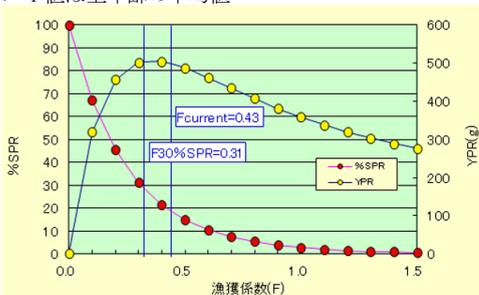


管理方策

明瞭な再生産関係が認められず、2006年以降RPSが低下傾向であることから、今後、漁獲圧を緊急に削減してSSBの回復を図りつつRPSが好転するのを待つことに加えて、人工種苗の効率的な添加によって加入量を増やすことが求められる。加えて、0歳魚の保護もしくは再放流も資源回復に重要と考えられる。また、本系群は複数の産卵場および成育場を有することから、ABCに基づく管理方策に加えて、各産卵場および成育場における資源管理が系群全体にとって重要である。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	147トン	0.6Fcurrent	0.26	20%
ABCtarget	121トン	0.8-0.6Fcurrent	0.21	17%

- F値は全年齢の平均値



資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、動向は減少
- 将来予測から現状の漁獲および人工種苗の放流が継続された場合、資源量は減少していくと推定される
- 明瞭な再生産関係が認められず、2006年以降RPSが低下傾向である
- FとSPRの関係から加入乱獲であることが示唆された

管理方策のまとめ

- 今後、漁獲圧を緊急に削減してSSBの回復を図りつつRPSの好転を待つことが求められる
- 人工種苗の効率的な添加によって加入量を増やすことが求められる
- 0歳魚の保護や再放流も資源回復に重要と考えられる
- 本系群は複数の産卵場、成育場を有することから、各産卵場および成育場での資源管理が系群全体にとって重要である

執筆者: 片町太輔・石田 実

資源評価は毎年更新されます。